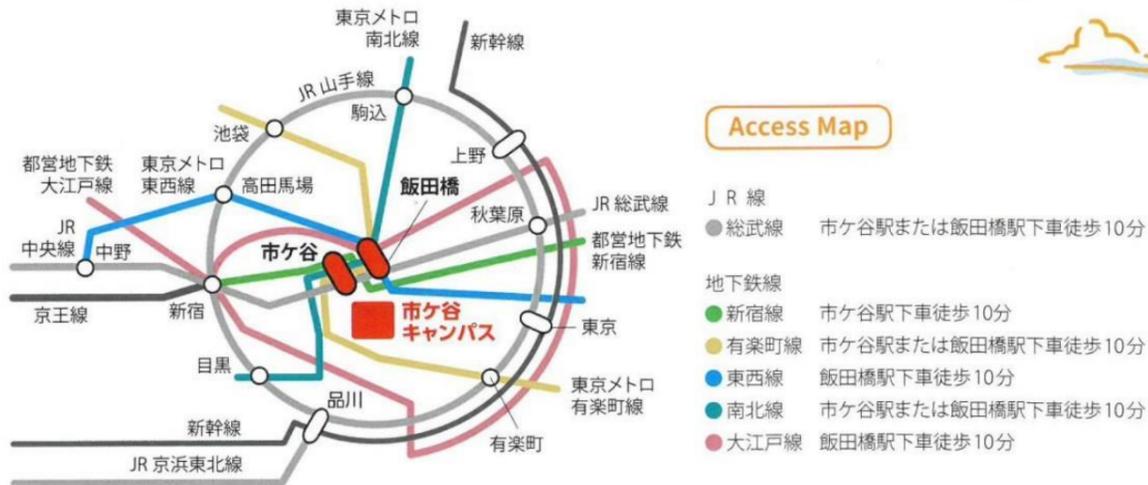


持続可能な社会

人も自然も大切にしながら、
みんなで今を生きて、未来を考える



この地球全てがあなたのキャンパス



自由と進歩
法政大学人間環境学部

市ヶ谷キャンパス
〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1
TEL. 03-3264-9327 <http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/>

法政大学 人間環境学部 検索

グリーン・ユニバーシティをめざして
法政大学では1999年3月人間環境学部の創設と同時に「環境憲章」を制定し、持続可能な社会の実現をめざす「グリーン・ユニバーシティ」宣言をしました。1999年9月に総合大学としては日本で初めてとなる「ISO14001」（環境マネジメントシステムの国際規格）の認証を取得し、大学の環境改善活動を開始し、環境教育の推進、ゴミの削減・省資源・省エネルギーを継続して実行しています。人間環境学部ではこの環境マネジメントシステムについて学ぶ講義も設けています。



フィールドスタディ・ カタログ 2016



UNIV.
HOSEI

五感で感じる
学びの旅へ

Welcome

2015年に実施した
フィールドスタディの実績を収録しています。自由を生き抜く実践知



フィールドスタディ のすすめ

人間環境学部のフィールドスタディは、**キャンパスを飛び出して現場を実際に体験し、現地の人びとと直接交流することを通じて、多くの生きた知識と経験を得ようというものです。**教室での学習だけでは**気づきにくい問題を発見し、日常生活のなかで漠然と抱えている問題意識を具体的なかたちで実感していくことが、フィールドスタディの重要な目的です。**

フィールドスタディは**1年生から参加できます。**各 Semester (学期) に1回ずつ、最大で在学中4回まで参加することができます。国内では**地域を再発見する学びの旅へ、海外では世界を体感する学びの旅へ、**毎年20コースあまりの多彩な企画があります。海外へのコースには、費用の一部を免除する奨励金制度も準備されています。

フィールドスタディは、単なる体験旅行ではありません。あらかじめ出発前にテーマに沿って**事前学習**を行い、必要な予備知識をたくわえます。その過程で湧いてきた疑問を現地で確かめ、さらに理解を深めるのです。終了後の**事後学習**では、現地で体感し学んだことを各自のテーマに沿ってまとめ、その後の学習に結実させていきます。

まずは試しに、**一步あたらしい世界へと踏み出してみませんか。**

※ 海外フィールドスタディの一部のコースでは、地球温暖化ガスの排出削減と、参加学生に対する環境教育を目的として、航空機による移動を対象にクレジットの購入によるカーボンオフセットを実施しています。



講義科目

多様な知識の習得
問題の多面的検討



フィールドスタディ

現場での問題発見
問題意識の具体化

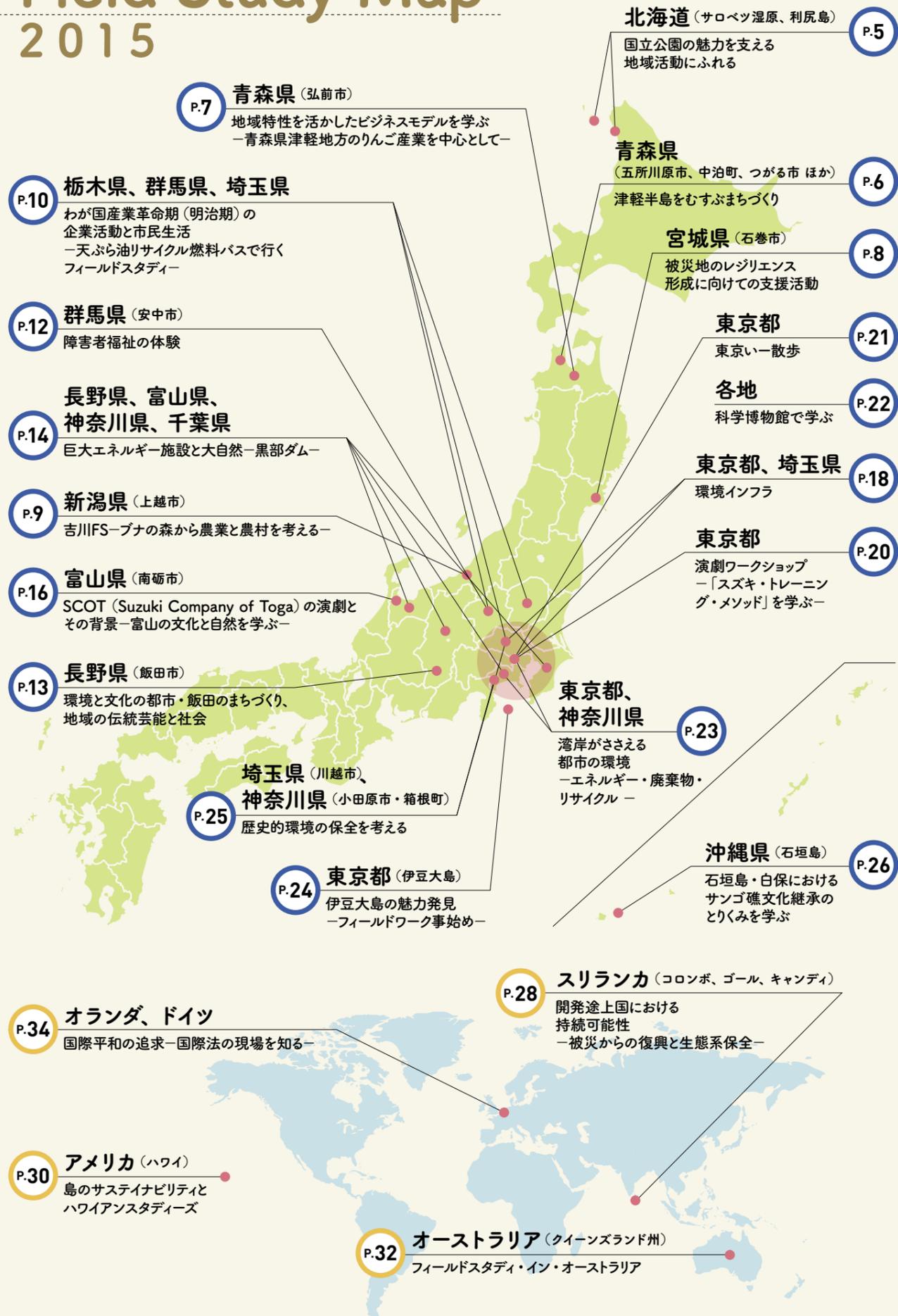


研究会 (ゼミナール)

研究課題への取組



Field Study Map 2015



1 国立公園の魅力を支える 地域活動にふれる



担当教員名 高田 雅之

コース概要

日程	2015年9月7日～11日
場所	北海道：利尻礼文サロベツ国立公園
参加人数	29名

コースのねらい

国立公園の優れた自然にふれ、またNPO活動などによる保全や、産業振興との共生に取り組む人々の活動現場を訪ね、自然の魅力を支える地域社会の在り方について学びます。また大規模ウィンドファームで自然との関わりを考えます。

内容

日本最北の国立公園「利尻礼文サロベツ国立公園」を訪ねました。初日はサロベツ湿原でNPO サロベツエコネットワークの方や、長くサロベツを見守ってきた地域の方のお話を聞いて、サロベツの自然やNPO活動、地域の人々との関わりについて学びました。また湿原の木道を散策しながらかつての泥炭の採掘跡地を見て、利尻岳をバックにした日本最大の高層湿原の雄大さを体感しました。圧巻は水平線に沈む夕日と、広い牧草地での満点の星空観察。星が流れるたびに歓声があがりました。

翌日は原始を思わせる砂丘列の森を探検し、植林用のドングリを育てるお手伝いののち、山本牧場に酪農の現場を訪ね、湿原と農地との共存の取り組みについて学びました。午後は環境省の自然保護官から国立公園の管理のお話を聞き、自然再生の現場を案内いただきました。

3～4日目はもうひとつの訪問地利尻島を訪ねました。利尻では島の経済を支えるウニ種苗センターの見学のほ

か、実際にウニ採り体験をし、採りたてのウニに舌鼓を打ちました。小型ボートでの小クルーズでは海をより間近に感じることができました。また利尻岳登山道の浸食問題やトイレ問題を現場で学び、外来種オオハングソウの駆除体験も行いました。博物館では地域の自然を知り資料を保存することの大切さを学びました。そして夜の「利尻塾」では島の自然を守り生かす活動に取り組んでいる利尻島自然情報センターや島ガイドセンターの方と実り多い意見交換をすることができました。最終日は自然エネルギーをテーマに稚内のメガソーラーと宗谷岬ウインドファーム(風車)を見学し、サロベツや利尻で説明のあった風車と景観や野鳥との関係について現場で考えました。

このコースの特徴は、国立公園の美しい自然を体感し、その最前線で活動する様々な方のお話を聞き、自然の保護と利用の「軋轢の姿」と「共生の姿」を見つけ出すことです。豊かな自然の地域にも多くの人が暮らしていて、地域との関わりなしに自然は守れないことを実感し、参加者一人ひとりに新しい発見をもたらしたのではないのでしょうか。

学習を終えて

高橋佑梨子さん(2年生)「広い大地と大空のもとで」北海道の大自然にふれながら、現地でも多くの方にお話しをきく中で、特に強く感じたことは人と人の繋がりの大切さです。自然環境や地域の資源を守る際、また観光で魅力発信する際にも、地域住民や研究者など様々な人が連携していることが印象深かったです。そのような人の繋がりが、地域の持続的な保全や振興に結びつくと感じ、また問題が生じた際には色んな立場にたって考えることが大事であると思いました。出会った人、得られた学び、美食に絶景、どれをとっても貴重な経験ができました!



▲ドングリ植林用の苗畑で草むしりに没頭(サロベツ)



▲外来種オオハングソウの引き抜き作業(利尻)



▲広い大地と大空のもとで

2 津軽半島をむすぶまちづくり

担当教員名 辻 英史・西城戸 誠

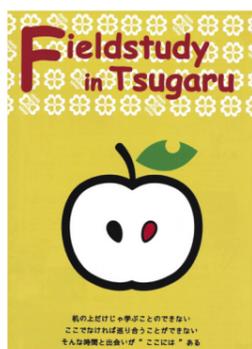


コース概要

日程	2015年2月18日(木)～22日(日)
場所	青森県五所川原市、中泊町、つがる市ほか
参加人数	20名

コースのねらい

「ふるさと」とは何か、「地域」で生きていくとはどういうことか。このコースでは、コミュニティカフェを中心に、津軽鉄道、グリーンツーリズム、伝統芸能などが一体となって着地型観光による地域の活性化に取り組む姿を学びます。



内容

コミュニティカフェ「でる・そーれ」

いろいろな人々が気軽に集まる場であるコミュニティカフェが、まちづくりの原動力にもなっています。



農家民泊

地域のご家庭にお邪魔して、郷土料理をご馳走してもらったり、話を聞いたり、実の子どものように歓迎していただきました。



ストーブ列車

津軽鉄道のストーブ列車で、金木町にある作家・太宰治の生家「斜陽館」を訪問します。



収穫体験

農家のビニールハウスでアスパラや水菜など野菜の収穫体験をします。



学習を終えて

このFSを通じて、たくさんの「人と人とのつながり」を感じる事が出来ました。自分の興味・関心のある社会関係資本を肌で感じることで、とても貴重な体験をさせていただきました。また五所川原のFSに参加したのは二回目だったので去年と違うところを発見したり、西城戸先生のおっしゃっていた事を思い返したりして、二回目だからこそその体験が出来たと思います。(2年 櫻井伶奈)

3 地域特性を活かしたビジネスモデルを学ぶ —青森県津軽地方のりんご産業を中心として—

担当教員名 金藤 正直



コース概要

日程	2015年8月25日(火)～28日(金)
場所	青森県中津地域県民局 津軽藩ねぶた村 弘前地域研究所 板柳町ふるさとセンター、りんごワーク研究所 弘果弘前中央青果(株) 弘前市りんご公園 弘前大学人文学部
参加人数	32名

コースのねらい

りんごの生産量が日本一である青森県には、りんごの生産、加工、流通、販売、研究機関などといったさまざまな組織が存在しています。これらの組織は、個々に活動しているだけでなく、ネットワークを構築(組織間で連携)しながら、商品開発や販路開拓・拡大などを行っています。このフィールドスタディ(FS)では、青森県津軽地方でのりんご産業に関連する組織や事業者への調査、「まち」の歴史・文化などを加味しながら、りんご産業の活性化策を提示していくことを目的としました。

内容

今年度のFSでは、りんご産業に関連している県民局や市町村(弘前市役所、板柳町役場)、この市町村が関わっている事業組織(弘前市りんご公園、板柳町ふるさとセンター、りんごワーク研究所)、研究機関(弘前地域研究所)、民間企業(弘果弘前中央青果株)などでの講義、見学、体験学習だけでなく、津軽藩ねぶた村での津軽地方



▲講義の様子

あるいは弘前市の歴史・文化などの学習、路地裏探偵団(地元有名人)との市内散策を通じて、「りんご産業の歴史—産業の始まりから

現在まで—」、「りんご産業を支える組織(生産、流通、加工、販売、研究機関等)の役割」、「組織間での連携事業(ビジネスモデル)の特長」を学習できました。そして、最終日に弘前大学で行った地元高校生(弘前実業高校)との活発な議論や報告な



▲りんごもぎり体験

どを通じて、りんご産業の活性化策をあらゆる側面から検討でき、また、「りんご産業において将来展開すべきビジネスの方法」についても提案できました。



▲地元高校生との議論の様子

学習を終えて

昨年度に引き続き、今年度のFSにも協力してもらいました小野孔明氏(弘前市りんご課)から最終日の報告会の際に、「現場にない発想で、示唆に富むものばかりである」、「同市が本年度策定している『りんご産業イノベーション戦略』に、こうした学生のアイデアを参考にしたい」などの意見をもらいました。FS終了後、参加した学生には、小野氏や、訪問先、弘前大学および弘前実業高校の先生の意見などを参考にしながら、報告会で使用した報告資料やその内容を再度整理し、また、それを参考に調査レポートにまとめてもらいました。なお、今回のフィールドスタディは、地元新聞社の記事にしてもらいました(東奥日報 11月4日夕刊3面に掲載)。

4 被災地のレジリエンス形成に向けての支援活動

担当教員名 辻 英史・西城戸 誠

コース概要

日程	2015年8月18日～22日
場所	宮城県石巻市北上町
参加人数	13名

コースのねらい

生業支援を中心とした復興支援ボランティア活動

東日本大震災の被災地では仮設住宅での暮らしが4年目を迎えている。本FSではNPO法人パルシックのボランティアとして石巻市北上町で漁業の手伝いをはじめとする作業をおこない、現地住民の方たちと交流しつつ震災復興の現状と被災地域のレジリエンス（回復力）の形成について学ぶ。



▲津波被害からの復興が進む北上市街中心部



▲漁具の手入れ

▲イベントでつくった花飾り

◆復興◆
【石巻市防災集団移転 仮設公営住宅の取組状況】(平成27年8月31日)
計画戸数 着手地区数 着手戸数 (進捗率) 完了戸数 (進捗率)
4500戸 75地区 3421戸 (76.0%) 1473戸 (32.7%)

～現状～
・堤防、かさ上げ道路、橋など建設中の物がいくつもある中、石巻市内には魚市場が完成。しかし防災集団移転、災害公営住宅の建設は途中のものが多い。
・防災集団移転をした人、仮設に住み続ける人、災害公営住宅に住む人、様々な人々の葛藤がある。
・たとえ道路はできていてもまだ仮設で暮らしている自分の住宅がない人「復興したとは言えない」

復興はまだこれから。「やっと始まった」という感じ。
→先の予定が少し具体的に見えてきた？

▲学生たちの作成したポスターから

内容

被災地視察ツアー

東日本大震災で大きな被害を受け、復興に向けた工事が進みつつある石巻市中心部を、津波の高さと被災状況を確認できるアプリを使って震災当時の状況を確認しながら、視察しました。

仮設住宅団地で住民の方々と交流

期間中は仮設住宅のなかの宿舎で生活し、住民の方々と言葉を交わし、そのあたたかさにふれました。北上町のもつ、大都市とは違う人のつながりや地域社会の豊かさに気がつかされました。震災体験やその後の復興の様子を話していただく「語り部」の時間も設けました。

漁業の支援

漁師の方の仕事場にお邪魔して、ワカメの茎切りの仕事をしたり、漁具の手入れを手伝います。

イベント開催

仮設住宅住民の方々と一緒に花飾りや伝統的なお菓子を作ったり、バーベキューで盛り上がりました。

成果の公開

法政大学大学院まちづくり都市政策セミナー（2015年10月開催）のポスターセッション「学生たちがフィールドへ」においてポスター報告をおこないました。

学習を終えて

「復興」とはどうすることなのか、どうなることが理想なのかということを考えさせられた。被災した場所全てを震災前の状態に戻すことは不可能だし、そうすれば良いかと言われれば決してそうではない。震災から学んだ様々な教訓を、今後の生活に役立てていくことは必要である。どうすれば正解なのか、といったはっきりとした答えは5日間ではとても出なかったし誰にも分からないことなのかもしれないが、一つ言えることは、まだ復興は終わっていないということである。（2年 大塚美早子）

※学生たちのレポートをご覧ください！ 人間環境学部ホームページ「東日本大震災と人間環境学部」で公開しています。

5 吉川FS —ブナの森から農業と農村を考える—

担当教員名 田中 勉

コース概要

日程	2015年8月16日～19日
場所	新潟県上越市吉川区
参加人数	21名

コースのねらい

ブナの森から水田地帯にかけての吉川の美しい自然にふれ、川や溜池からの水の利用、棚田の多面的機能など農業と自然のかかわりを実感し、集落営農・新規就農の事例を通して農業の新たな展開についても学びます。

内容

上越市吉川区は稲作を中心とする農業地域です。尾神岳（750m）から日本海にかけての、山間地に点在する棚田、平地の大規模区画の整備された水田、という対照的な農業の姿を見ることができます。日本の農業の縮図と言える地域です。ここで2000年以来15回のフィールドスタディを実施してきました、参加者は延べ300名を超えています。

このFSの魅力は「発見」です。プログラムの特徴は、自然と農業の関係を具体的に考えるために、ブナの山から川の流れをたどりながら取水堰・溜池・用水路・田んぼへ

と水を確保・利用する工夫を見学する、そして高齢化と後継者不足という厳しい現実の中での新たな展開を学ぶ。いずれも関係者から直接話を聴く、実地に見学するという五感を使っのFSです。

毎日が「発見」の連続です。満天の星、ブナの葉のそよぎ、稲穂の波、自然の美しさと豊かさを実感します。一方で、思い通りにならない天候、日照りや長雨、猪や鹿の獣害、自然の厳しさ知ることにもなります。「発見」に満ち、人の優しさ暖かさをしみじみ感じる吉川FSは、学生生活を豊かにしてくれます。

学習を終えて

「多少は農業を知っていると思っていましたが大違いでした。このFSで、自分たちの地域を守っていこうと集落営農はじめ様々な取り組みが行われていることを知り感銘を受けました。山間地の集落で、東京での仕事を辞めて農家になった方の『何のために働いているのか分からないほど忙しい都会の日々よりも、のどかで空気も人も全てが優しい此処で自分の仕事に誇りを持って働きたい』というお話に、自分は何をしたいのか、何をすべきなのか深く考えさせられました。吉川の雄大な自然を身体全体で感じることもでき、本当にいい勉強になったと思います」（1年、三村菜由）



▲用水路の分岐で水配分の仕組みを学ぶ



▲農業生産法人で集落営農について学ぶ



▲1年女子組

6 わが国産業革命期（明治期）の企業活動と市民生活 —天ぷら油リサイクル燃料バスで行くフィールドスタディ—

担当教員名 長谷川 直哉

コース概要

日程	2015年9月7日～10日
場所	栃木県（足尾銅山）、群馬県（富岡製糸場等）、 埼玉県（渋沢栄一記念館等）
参加人数	22名

コースのねらい

日本の近代化を支えた足尾銅山と富岡製糸場・絹遺産群を訪問し、殖産興業を支えた渋沢栄一の経営理念や地域社会の人々の活躍を学びます。また、わが国初の公害となった足尾鉍毒事件における政府・企業と被害住民の対立の実

態、鉍毒反対運動のリーダーとして活躍した田中正造の思想と行動の現代的意義を考えます。

内容

第1日目 足尾鉍毒事件の爪痕を辿る

今から100年以上前、わが国初の公害となった足尾鉍毒事件に関する地域や施設を巡りました。明治政府によって強制移住させられた谷中村や松木村の廃墟、山腹に放置された銅の製錬カス、今も鉍毒水を湛える貯水池等を見学し、廃墟となった旧松木村では現地NPOと植林作業を行いました。東日本大震災によって貯水池の堤防が崩れて鉍毒水が流出した事実を知り、足尾鉍毒事件が今私たちの生活に暗い影を落としている時事に衝撃を受けました。

第2日目 渋沢栄一記念館とサンデンフォレストで企業の社会的責任を学ぶ

生涯に約500の企業を創設し、同時に約600の公共事業にも携わった渋沢栄一の生家と渋沢栄一記念館を訪ねました。記念館では、学芸員による詳細なレクチャーを受け渋沢栄一の活動の背景となった理念や思想の背景を学びました。サンデンフォレストは、C.W.ニコルが監修した赤城山南麓にあるサンデン(株)の生産工場です。民間で初めての大規模な近自然工法の思想と技術を導入したサステイナブルな製造施設を見学しました。

第3日目 富岡製糸場産業遺産で近代化を支えた人々について学ぶ

西洋と日本の技術を融合してつくられた日本初の本格的な製糸工場を訪問し、富岡製糸場の従業員教育や組織運営の実態を学びました。良質で安価な生糸を生産する上で、工女（人材）の果たした役割の大きさを改めて実感しました。

第4日目 絹遺産群にて近代化を支えた地域社会の役割を学ぶ

近代的養蚕技術を確立した田島弥平旧宅を訪問しました。田島は『養蚕新論』を著し自然の通風を重視する「清涼育」を開発し、生糸の増産と品質向上に貢献しています。この地域の養蚕農家がヨーロッパに進出して、蚕の卵を販売していた事は大きな驚きでした。

学習を終えて

私は歴史の教科書でしか知らなかった足尾銅山を訪れました。古河財閥が引き起こした鉍毒事件が一世紀の時を経て、今尚人々を苦しめ続けている実態を始めて目の当たりにした時、企業が社会に与える影響の大きさを痛感しました。また、その時代を生き抜いた偉人たちの志の高さに感銘を受け、社会の公器としての企業の責任の重さを改めて感じました。



7 障害者福祉の体験



担当教員名 宮川 路子

コース概要

日程	2015年8月3日～21日
場所	群馬県安中市松井田町ゆきわり山荘
参加人数	16名

コースのねらい

障がい者の方々と寝食を共にして過ごすことで、福祉活動の大変さを体験し、人間として、人生のあり方、生き方を見つめ直すことを目的としています。

内容

障がい者の方と1対1で向き合い、3泊4日の合宿で様々な活動に参加しながら寝食をともにします。活動内容はマラソン、水遊び、温泉、観光、ハイキング、プール、和太鼓、バーベキュー、野菜収穫、馬とのふれ合い、食事作りなどバラエティーに富んでいます。学生は障がい者とふれあうのが初めてという人が多く、参加前には不安そうでしたが、FSを終えた後には、達成感と充実感で自信に満ちた顔つきに変わりました。障がいがあってもなくても同じ人間であり、特別なことは一切ないということを知り、皆安心するとともに温かい気持ちになったようです。言葉が通じなくても気持ちが通じるということ、笑顔が人を幸せな気持ちにさせること、ふれ合い、ぬくもりが安心感を与えること、当たり前のように普段の生活では忘れていたような小さなことがいかに大切かを気づかせてくれる



▲近くの畑で育てている野菜を障害者と一緒に収穫します

実習となりました。相手が障がい者であろうと、健常者であろうと関係なく、人との関係を構築するうえで、相手を理解しようと努力し、思いやる心が相手の心を開き、そして自分の心も癒やされることを実感しました。実習の終わりのお別れのときには寂しい気持ちがこみあげて涙を流す学生も多くいました。

学習を終えて

学生の感想：事後学習の後に提出されたレポートはしっかりと書かれているものが多く、また後から自主的に書き直して再提出してきた学生までいました。共通している感想としては、「コミュニケーションの大切さ、相手を理解しようとする努力が大切だということ、障がい者も健常者と変わらないが、現在は偏見を持つ人が多く、もっとたくさんの人がボランティア活動などを通じて障がい者を理解し、ともに暮らす地域を作り上げていくことが重要だと感じた。今回のFSに参加しただけで終わらないように、この経験を社会に広めていこうと思う。」というものでした。

施設の感想：事後学習ではゆきわりそのの姥山先生にも参加して頂きましたが、学生さんの真剣な意見交換、発表を聞いて、学生さんのひたむきさをひしひしと感じ、これを是非スタッフに還元したいとのことで、来年度は事後学習をビデオに撮りたいとお申し出がありました。実際の合宿では介護を学んでいる学生とも一緒に実習となりましたが、そのような学生と比較しても人間環境学部の学生は真面目で気が利いてコミュニケーションがよくとれ、よく働くというお褒めの言葉を頂きました。



▲できあがったカレーライス、きゅうりの即席漬けなど、これから皆で頂きます！

8 環境と文化の都市・飯田のまちづくり、地域の伝統芸能と社会



担当教員名 石神 隆・金藤 正直

コース概要

日程	2015年8月7日～10日
場所	長野県飯田市
参加人数	46名

コースのねらい

旧城下町の飯田市は、人口約10万人の自然豊かな地方都市です。ここは人形劇とリンゴ並木を愛し、エコツーリズムを推進する南信州の環境文化都市として有名です。当フィールドスタディでは、人形劇フェスティバルへの参加、また、環境重視のまちづくりをめざす飯田市の行政を多方面から学ぶことにより、新しい地域のあり方を考えます。さらに、地元で長く伝わる芸能を鑑賞、また、妻籠(つまご)地域などの伝統的町並みを視察することにより、文化の伝承と地域づくりを総合的かつ体験的に学習していきます。

内容

【現地学習の流れ】

- 1日目 朝、東京発(全行程 貸切バス) 中央高速道路、諏訪インター経由で長野県へ
午後、伝統的建造物群保存地区(旧中仙道宿場町、妻籠宿、馬籠宿)の町歩き学習 夜、現地オリエンテーション
- 2日目 午前 まちづくり講義(飯田市長ほか)(他大学からの参加者と合同) 午後 人形劇フェスティバル見学、街歩き
夜 りんごん祭り(町ぐるみ夜踊り)に全国からの大学と合同で大学連として参加



▲飯田りんごん祭りに参加



▲伝統芸能鑑賞、当演目の出演は全て米国人



▲地域の食文化、そば打ちの実習

- 3日目 午前 まちづくり講義(自然エネルギー会社社長など) 午後 伝統的芸能「人形浄瑠璃」の鑑賞(郊外部にて)
夕刻 南信濃遠山郷(山間部)に移動 山間部の自然や食文化等を学習
- 4日目 午前 遠山郷の民俗、文化探索(旧街道町、旧小学校など) 昼 地域の方の指導による「そば打ち」を経験
午後 飯田市の伝統的産業の一つ「水引工芸」を見学 夕刻 東京着

【事前・事後学習】 事前に各人が興味を持ったテーマにつき、事前の調査レポートを作成し報告します。実際に現地に行き、さらに関心を持ったテーマや深めた内容につき事後の調査レポートを作成し報告しあいます。現地での報告会や事後報告会では、現地学習の成果や、今後の地域学習の展望を皆で大いにディスカッションしました。

学習を終えて(参加学生の声)

「今回初めてのフィールドスタディで緊張しましたが、古い町並みや今まで食べたことのないものを食べたり、お祭りに参加し地元の方とお話ししたり、たくさんの経験をする事ができました。飯田市の方々の町おこしに対して積極的な様子を見たり、聞いたりして、あらためて市民の方が町おこしに参加することの大切さ考えることができました。実際に現地に行って地域の魅力の多さに気づき、体験することが、地域を学習するのにとても大切だとわかりました。」(1年 岡部美果)

「今回のフィールドスタディを通して、あらためて自分の住んでいる町をもっと知りたくなりました。そして、自分の町を好きになって誇りを持てるようになりたいと感じました。」(2年 山田 桐)

9 巨大エネルギー施設と大自然 —黒部ダム—

担当教員名 北川 徹哉

コース概要

日程	2015年9月1日～4日
場所	長野県, 富山県, 神奈川県, 千葉県
参加人数	22名

コースのねらい

黒部ダムはわが国の重要な電力施設であり、建造史にも興味深いものがあります。その人工物としての巨大さと周囲の自然の雄大さを体感します。また、天然ガス貯蔵、火力発電、風力発電、メガソーラーなどの各施設も視察します。

内容

エネルギー施設の多くは巨大であり、人の生活圏から遠く離れていたり、自然に囲まれたところにあるため、普段は目にしない非日常です。その一方で、エネルギーは国家が国家として存続するための、社会が社会として成立するための血液であり、いつも私たちの周りにある日常です。このコースは、そんな日常・非日常の両面を意識しながら、エネルギーの巨大供給施設をできるだけ多く見ようというものです。まず、東京ガス袖ヶ浦LNG基地では、東京湾を臨む広大な敷地内のLNG（液化天然ガス）地下タンク群、都市ガス製造・供給、火力発電、風力発電などの各施設を見学しました。日本はLNGのほとんどを輸入し

ており、この基地に來航するLNGタンカーは年間220隻以上にのぼるそうです。浮島メガソーラーでは、整然とならぶ太陽光発電パネルの多さに驚きつつ、それが土地の有効利用によって実現していることを学びました。そして黒部ダムでは、その怖いほどの巨大さと周囲の大自然の美しさにすっかり魅了されました。ダムカレーやダムラーメンなどの名物も楽しみ、またいつか訪れたいと願いながら帰路につきました。

学習を終えて

参加学生の黒部ダムについての感想をいくつか紹介します。「黒部ダムとその周辺の景色には言葉が失うほど感動しました。迫力ある放水はもちろん、それによって見れる虹といったら、もう言葉では表すことができないほど美しかったです。」「黒部ダムは、私が想像していたものを遥かに超えるスケールのものでした。黒部ダムが造られた当時、莫大な費用がかけられて造られたもので国内最大規模のダムということは私も知っていましたが、映像や写真で見るとはまるで違うものでした。当時の人が山奥にこれほどまでの巨大施設を造り上げたということに非常に驚かされました。」「黒部ダムの壮大さや建設時に殉職者が171人も出たという過酷さを身をもって感じる事ができました。」「扇沢駅から関電トンネルトロリーバスに乗り、黒部ダムへ着くと、その圧倒的な大きさに息をのんだことを今でも鮮明に覚えています。」



▲浮島メガソーラーでの勉強



▲黒部ダムとその周囲の自然



▲東京ガス袖ヶ浦LNG基地



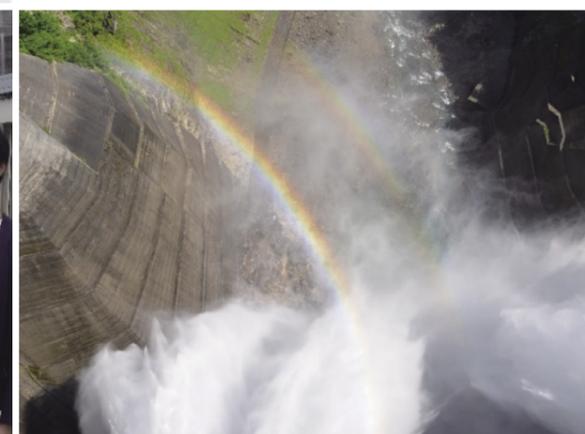
▲LNG地下タンクの外観



▲LNGの温度は？



▲当日は強風でLNGタンカーが着岸できず、沖で待機中でした。



10 SCOT (Suzuki Company of Toga) の演劇とその背景 —富山の文化と自然を学ぶ—

担当教員名 平野井 ちえ子・高田 雅之

コース概要

日程	2015年8月20日～23日
場所	富山県南砺市・砺波市・富山市
参加人数	11名

コースのねらい

利賀（南砺市）は、芸術創造による真の国際交流の場として、世界の演劇人から「演劇のメッカ」と称されています。本FSでは、観劇だけでなく、利賀とその近隣の文化と自然を学び、演劇と場の関わりについて考えます。

内容

タイトルにあるとおり、本FSの中心テーマは、SCOTの芸術創造の場を探訪し、その作品世界により一層の理解を深めることです。そのためには、ぜひとも五箇山に現存する合掌造りの集落を見学し、豪雪地帯の自然・文化・歴史についても学べる旅にすべきであると考えました。また折しも、2015年3月に北陸新幹線が開業し、東京から北陸各地へのアクセスが便利になりました。かがやき号なら、東京—富山間は2時間強です。それでもなお、富山市内から利賀芸術公園までの道のりは、旅慣れない学生の個人旅行としては少々ハードルが高そうです。そのような旅こそ大学の授業として後押ししたいという思いも、本FS企画の追い風となりました。さらに、富山市内に宿泊することを生かして、全国的に有名な「おわら風の盆」や砺波の散居村も探訪したいと、夢はどんどん膨らんで、最終的に以下の行程が確定しました。

- 1日目：JR富山駅集合、富山県自然博物館ねいの里を見学、おわら風の盆前夜祭ステージ・町流しを鑑賞。
- 2日目：相倉・菅沼の合掌集落をはじめとする五箇山を訪問。夕陽の砺波散居村を展望。
- 3日目：SCOTサマーシーズンの3演目を観劇。
（合掌造りの民家を劇場に改造した「新利賀山房」、池や山など利賀の大自然を背景に盛大な花火の美しい「野外劇場」などでの観劇です。）
- 4日目：富山市および近隣地域でのグループ別学習、夕方現地解散。

SCOTサマーシーズンでは、6カ国語版『リア王』（新利賀山房）と『世界の果てからこんにちは』（野外劇場）という2つの鈴木演出作品と、ユネスコ無形文化遺産であるインドの『チョウ・ダンス』（利賀大山房）を観劇しました。新利賀山房の『リア王』では、前日に学んだ合掌造りの知識で演出の効果がよくわかったと思います。また、『世界の果てからこんにちは』は、古代ギリシャの劇場に原型を求めた本格的野外劇場で上演されました。池や山を借景に大がかりな照明や花火が盛り上がる舞台は、まさに至福の極みでした。

演出家鈴木忠志氏は、1976年に、東京から利賀村へ活動の拠点を移しました。その理由は3つあります。第1



▲威風堂々たる佇まいの「新利賀山房」。合掌造りの劇場としては国内最大級。



▲第1回世界演劇祭のために建設された野外劇場。いずれも磯崎新氏の設計。

に、時間的制約のない稽古場と公演のために自由にアレンジできる空間の確保を望んだということ。第2に、既存の劇場ではない新しい空間、とくに生活の痕跡が残る空間を劇場にしたかったこと。第3に、東京の日常から切れたところで演劇をやりたいかったということ。FS参加者は、現地に足を運んでみて、鈴木氏の劇場についての考えが実感できたと思います。

学習を終えて

南砺市文化・世界遺産課課長 此尾治和様から次のメッセージをいただきました。

南砺市「五箇山」には、45年前に国の史跡指定を受けた懐かしい原風景が豊かに息づく、相倉集落と菅沼集落の2カ所の合掌造り集落があります。

他に類を見ない合掌造りの建築様式と景観に加え、これを守るために受け継がれてきた「暮らし」が高く評価され、平成7年12月に白川郷とともに世界遺産に登録されて20周年という大きな節目を迎えました。

世界中から注目を浴びる合掌造り集落は、その地域に住む人々だけでなく、市民一体となった保存継承活動が重要であり、「南砺の宝、日本の宝」を誇りにして後世に引き継いでいかなくてはならないと考えております。

法政大学の皆様には、合掌造り集落などの歴史ある伝統文化とSCOT演劇などの創造的な文化が融合する「文化芸術創造都市・南砺」のファンになっていただき、今後も再訪されて調査研究いただくことを願ってやみません。

FSに参加した大古千聖さんの感想です。

富山県には伝統的建築様式の1つである合掌造り家屋を守っている方々がいらっしゃいます。

利賀村で活動している劇団SCOTは合掌造り家屋を劇場として利用し、その構造を活かした演出をしています。とくにその照明による効果がとても美しく印象的でした。

合掌造りの茅葺屋根は、30～40年に一度葺き替えが必要です。この大変な作業も、かつては村の助け合いで行われていて、そこには強いコミュニティがありました。

伝統継承には計り知れない労力と莫大な費用がかかります。このことは、写真だけではなかなか想像ができません。実際に現地でお話を伺うことで十分に理解することができました。

このように伝統を愛し守り続けている方々の努力があってこそ、日本がこの世界遺産を誇ることができるのです。



▲五箇山の村上天家（国指定重要文化財）合掌造り家屋の2階にて。



▲相倉合掌造り集落で記念の一枚：本学参加者と、御協力くださった南砺市「文化・世界遺産課」の此尾さんと山本さん。



▲相倉合掌造り集落のパノラマビュー



コース概要

日程	2015年8月17日～20日
場所	東京都、埼玉県
参加人数	14名

コースのねらい

浄水場、下水処理場、清掃工場、廃棄物処分の現場を見学し、技術と現状を学びます。多くの小学校ではこのような施設見学を行っていますが、大学生になって、新たに知識を習得した上で、もう一度、見直すことも大切なことです。

内容

落合水再生センター

落合水再生センターは都心部にあるので、土地の有効利用を図るため、敷地の多くをコンクリートで覆い、上を公園にして市民に開放しています。受け入れた下水に含まれる有機物は微生物の力で除去されます。その後、処理水は砂で濾過されて神田川に放流されますが、一部はさらに濾過され、塩素で滅菌されて、近隣の新宿副都心の高層ビル群に中水道として供給されます。オフィスのトイレ水洗浄として再利用されるのです。



▲下水処理場では大量に発生する汚泥からリサイクル商品開発を試みているが売れません。殆ど焼却して埋め立てているのが実態です。

金町上水場

1926年に運用が開始された歴史ある浄水場です。江戸

川の水を浄化して都内に供給しています。水を砂で濾過して水道水を作ります。これで十分なのですが、「おいしい水」を求める都民の声に応えるために、今ではさらにオゾンと生物活性炭で高度処理しています。ここでは2013年から全量が高度処理水になり、都内に給水されています。また、『東京水』という名のボトルウォーターにもなって、東京都の施設で市販されています。



▲金町浄水場の高度処理施設：オゾンによって不純物が分解され、より美味しい水が作られます。

新江東清掃工場と中央防波堤最終処分場

東京都23区から出る家庭ゴミと事業者が排出するゴミ（事業系一般廃棄物）は、23か所の清掃工場で焼却されます。そこから出た焼却灰は東京湾にある中央防波堤埋立地に埋め立てられます。ゴミの分別リサイクルが進んだ結果、ゴミの発生量は毎年、少しずつ減少してはいます。け



▲最終処分場に降った雨水は焼却灰から有機物などを溶かし出すので真黒になります。地下や周辺に漏れ出ないように集められ、きれいになるまで処理してから海に放流されます。

れども、今、埋め立てられている区画が一杯になると、もう埋める場所はなくなります。東京都では貴重な埋立地の寿命を1日でも延命するための努力が続けられています。

株式会社3R（スリー・アール）

埼玉県久喜市で自動車リサイクルを行っている工場です。日本では廃車のリサイクル率は約99%に達しています。廃車は最後にはプレス機で潰され、溶かされて、鉄としてリサイクルされます。けれども、リユースして転売できる部品は、その前に徹底的に取り外されて売り出されませんが、ガソリンタンクのキャップは日本では売り物にはなりません、アフリカではガソリン泥棒が多いので良く売れるとか。私たちの見学中も、中東などから何人ものバイヤーが来ていて、売れそうな部品を探していました。

学習を終えて

安全でおいしい水に感謝

毎日の生活に欠かせない「水」。インフラが整備され、日本では安全でおいしい水が、いつでもどこでも水道の蛇口からでてくるようになりました。

事前学習で、上下水の技術や廃棄物処理などについて学び、日帰り連続4日間のフィールドスタディ当日を迎えました。

「落合水再生センター」では、水資源の有効活用として新宿副都心での再生水利用を学びました。

その翌日は葛飾区柴又の寅さんの像を目標に待ち合

せ、「金町浄水場」に向かいました。広大な敷地を歩きながら、水質浄化を目と足で確認しました。見学後は帝釈天にお参りし、仲間と情報交換をしながら、かき氷やお団子に舌鼓を打ち、有意義で2倍楽しい時間を過ごしました。

後半2日は、廃棄物処理や3Rをテーマに新江東清掃工場、中央防波堤最終処分場、自動車リサイクル企業を見学し、環境保全の基盤を支える諸施設を自分の目で見て、感じて、考えることにより学習が深まりました。

(遠山晴美 2年生 社会人学生)

人間と環境の関わりを考える

このフィールドスタディに参加して感じたことは、日本の技術水準の高さと人々が安心して暮らしていくために働いている皆さんに、感謝しなければならないということです。日本経済が発展し、価値観や生活様式が多様化するに伴い、人々はより豊かな生活と利便さを追求しています。日本は「大量生産」「大量消費」「大量廃棄」の社会となっています。廃棄物処理・リサイクルを考えることは人間と環境の関わり、環境問題の本質を考える上で極めて重要です。

とりわけゴミ問題は重要です。ゴミの減量のために、人々には日常生活の意識改革が求められ、発生抑制・排出抑制に取り組まなければなりません。排出者である市民、生産・販売を行う事業者、そして、行政の協働なくしてゴミ問題の解決はできないことが、このフィールドスタディを通じて実感することができました。環境問題は将来を見据え、身近な問題から一人一人が直視する必要があることを痛感しました。(池澤正紀 1年生 社会人学生)



▲取り外されたエンジン。中古品として販売されます。

12 演劇ワークショップ —「スズキ・トレーニング・メソッド」を学ぶ—



担当教員名 平野井 ちえ子

コース概要

日程	2015年9月14日・15日(ワークショップ) ／12月19日・21日(舞台鑑賞)
場所	芸能花伝舎(ワークショップ)／吉祥寺シアター(舞台鑑賞)
参加人数	20名

コースのねらい

世界の演劇人が注目する「スズキ・トレーニング・メソッド」の初歩を体験し、演劇表現のための身体訓練を学びます。コミュニケーションに必要な感性や演劇作品に対する鑑賞眼を養います。

内容



▲訓練1の足踏みを全員一斉にやっています。ものすごい震動でした。

「スズキ・トレーニング・メソッド」の創始者である演出家鈴木忠志氏と劇団SCOT (Suzuki Company of Toga) の協力のもとに実現した、実技編と鑑賞

編から成るとても贅沢な演劇ワークショップでした。

日程前半の実技編では、SCOTの女優である木山はるか氏の指導により、プロの演劇人も利用する芸能花伝舎という稽古場で、「スズキ・トレーニング・メソッド」の初歩として「訓練1」と「訓練2」に取り組みました。「訓練1」は力強く床を踏みしめる足踏みで、踏んだ震動が上半身に上がるのと闘って重心を一定に保ちます。「訓練2」は緩やかな速度で美しく緊張感のある水平移動を見せる歩行訓練です。いずれの訓練においても、身体の重心・呼吸・エネルギーについての感性を研ぎ澄まさなければなりません。また、この訓練を「診断でもある」と言う鈴木氏のことばのとおり、一見簡単な動きの中にも各受講者の個性が浮かび上がります。本当はとても厳しい訓練なのですが、木山先生の巧みな構成で、素人の受講者にも無理のないステップアップができました。先生の経験談なども、とても楽しく伺いました。

日程後半の鑑賞編では、SCOTの吉祥寺シアター公演から、ギリシャ悲劇『エレクトラ』の舞台を観劇し、「スズキ・トレーニング・メソッド」を公開・解説する『鈴木演出教室』にも参加しました。『エレクトラ』では、鍛え抜かれた俳優たちの存在感と高田みどり氏の緊迫感漲る打楽器演奏で、完成された1つの鈴木作品にふれることができました。また、上演後の鈴木氏との質疑応答では、初めて鈴木作品を観た人から数十年来の観客まで幅広い層からの質問に答えられました。『鈴木演出教室』では、SCOTで毎日実施している身体訓練を作品との関わりで体系的に見学することができ、演劇の台詞に関する鈴木氏の考えをわかりやすく解説していただきました。

年末に事後講義などの日程がタイトで大変だったかもしれませんが、このフィールドスタディに参加して、「スズキ・トレーニング・メソッド」とSCOTの舞台作品との関わりがとてもよくわかった」とか「芸術はこのように創られるのかと感激した」など、大好評でした。

学習を終えて

本FSに参加した佐々木梢さんの感想

演劇ワークショップに参加し、スズキ・トレーニング・メソッドの初歩をSCOTの女優さんに教えていただきました。

ただ見ているのと自分で実際に行うのではまったく異なり、身体の中の部分を意識するのかなど、普段は鈍っている身体の感覚が活性化でき、良い経験になりました。また、SCOTの演劇を劇場で鑑賞したり鈴木さんの解説を直接聴いて、トレーニングが舞台にどう活かされているのか、なぜこのトレーニングをするのかがよくわかり、貴重な学びになったと思います。



▲訓練2の静かな迫力。集中しています。



▲2日間のトレーニングを終えて、木山先生と。

13 東京いー散歩



担当教員名 後藤 彌彦

コース概要

日程	2015年9月1日、3日、8日、10日
場所	東京官庁街、下町、山の手
参加人数	10名

コースのねらい

江戸と東京のまちづくりに関する施設を訪ね、その歴史を学ぶとともに、今後の東京の都市環境、都市景観、都市の緑と防災を考える視点を提供します。

内容

- 1日目 昭和初期の官庁計画による旧文部省ビルで大臣室などを見学しました。次ぎに国会議事堂、国会前庭、桜田門などを遠望しながら、明治の官庁集中計画による旧法務省庁舎と中の法務資料展示室を見学しました。農林水産省食堂で昼食ののち、日比谷図書館(千代田区の都市形成に関する展示)、日比谷公会堂を見つ、日本初の西洋式庭園である日比谷公園を散策しました。次ぎに皇居外苑、噴水公園を経て、東京駅丸の内口で解散しました。
- 2日目 深川江戸資料館で江戸の暮らしを学んだのち、清澄庭園を訪ねその歴史と都市の緑の拠点としての役割を学びました。パン工場での昼食ののち、隅田川に沿って散策し、気候緩和など都市における河川の働きを考えながら、清洲橋などの景観を楽しみました。終わりに明暦の大火に関する回向院を訪ね、両国で解散しました。
- 3日目 上野公園から不忍池を経て、旧岩崎庭園でコンドル設計の明治期の洋館建築を見学しました。東大



▲旧文部省ビルで大臣室



▲地震の科学館で震度7を体験



構内を散策し、赤門や昭和初期の校舎建築を見るときともに食堂で昼食をとりました。水道歴史館で江戸から現在に至る水道を学び、終わりに震災小公園元町公園を訪ね、水道橋で解散しました。

- 4日目 王子駅近くの音無親水公園を経て、江戸庶民の行楽地飛鳥山公園を歩き、隣の渋沢栄一の屋敷跡を訪ねました。西ヶ原一里塚を経て、地震の科学館で震度7を体験し、旧古河庭園で和洋調和した庭園を散策しました。女子栄養大学で昼食ののち、西ヶ原ふれあい公園で防災と環境を考慮した都市公園を見学しました。終わりに、旧中山道を歩きとげ抜き地蔵に参拝し、巣鴨で解散しました。

学習を終えて

私は今回のフィールドスタディを通し、今回の実際に町を歩くことでしか得られない経験もあるのだと実感した。自分では滅多に足を運ぶことがない深川江戸資料館、法務資料展示室、水道歴史館等を見学することで、普段あまり触ることがない文化についての興味と考察の機会を得ることが出来た。また日比谷公園、清澄庭園、旧岩崎庭園など、多くの歴史ある庭園に赴き、そこで東京に残る自然に触れ、またそれを維持・管理する人々の努力も垣間見ることが出来た。更に隅田川沿いなどの町歩きの際にも、その地域の細かな歴史を学び、都市が形成されていく様子を歩いて感じられた。

今回のフィールドスタディでは、東京の成り立ちと都市づくりに関して、歴史や環境、防災など、様々な角度の視点から学ぶことが出来たと思う。自分達で実際に歩き、見て、触れることで、授業で聞くだけでは分からない情報も得ることができた。今後の都市環境・都市景観・都市の緑について考えていく為の大変いい経験になったと思う。

3年 宇井 瑞貴

14 科学博物館で学ぶ

担当教員名 谷本 勉

コース概要

日程	2015年8月～2015年11月
場所	各地の科学博物館
参加人数	5人

コースのねらい

大学外で環境問題等を学ぶための現場（フィールド）として、各地の科学博物館を自在に使いこなせるようになることを目的とします。

内容

「科学博物館で学ぶ」は、グループ学習ではなく、参加者がそれぞれ立案した計画に従って学習していきます。具体的には、各地の科学博物館でどのような参加型の企画・セミナーが行われているかを調べ、参加するイベントを決定し、学習していきます。

最初の説明会において詳細な実施要領を解説します。その後、参加者は事前に学習計画書を作成し、担当教員と相談しながら、参加する学習内容についての理解を深めます。

学習計画に際しては、1つのテーマが4時間以上のものを1日分の学習として認め、それ以下のものを半日分とし

て、合計4日以上以上の学習をすることを義務づけています。

たとえばFSさんのFSさん場合は以下のようなイベントに参加しました。

8月23日「埼玉県立自然の博物館」：学習のテーマ：フンコロガシの仲間調べ

学習の目的：長瀬という自然に囲まれた地で、あまりなじみのないフンコロガシについての知識を深めたいと思いました。

9月13日「さいたま市青少年宇宙科学館」：学習のテーマ：植物画教室

学習の目的：普段私たちの身近にあるが、あまり注目されない植物たちについて自ら摘んできて分解し、詳細な図を自ら描くことにより植物の役割や種類、生命の尊さを深く知るとともに植物に対する理解を深めたいと思いました。

学習を終えて

普段自主的に博物館や科学館に行かないし、イベントなどが行われていることも知りませんでした。そこに参加することによってさまざまな年代の方々と交流できたことが今回のFSで印象に残りました。また知らない土地を散策できたこともちょっとした小旅行のような気分で楽しめました。



▲ゼラニウム（テンジクアオイ属）
ひたすらリアルに一本線で重ね塗りせずに



▲左：ゾウの糞のトラップにかかったフン虫の標本
右：イヌの糞のトラップにかかったフン虫の標本

15 湾岸がささえる都市の環境

—エネルギー・廃棄物・リサイクル—

担当教員名 渡邊 誠・松本 倫明

コース概要

日程	2015年8月20日, 9月1日～9月3日
場所	東京スーパーエコタウン、イワタニ水素ステーション芝公園、東京ガス根岸工場、川崎市メガソーラー、東京都中央防波堤埋立処分場、ほか関連施設
参加人数	15人

コースのねらい

このコースでは、エネルギー・廃棄物・リサイクル関連の施設を訪問します。湾岸エリアに点在するこれらの施設を短期間で集中的に見学します。見学を通じて都市の環境を支える科学技術を学ぶことを目的としています。さらに都市におけるエネルギーと物質のフローについて考えます。

内容

大都市に住む我々は大量のエネルギーを消費し、大量の廃棄物を排出します。また廃棄物のある部分はリサイクルされ、ふたたび消費されます。このような、物質とエネルギーの流れは都市に生活していると実感しづらいものです。このコースでは、大都市から近い湾岸地区に出かけ、エネルギー、廃棄物、そしてリサイクルに関連した施設を

集中的に見学します。

訪問先は比較的近距离のため、すべて日帰りで行います。社会人学生や1年生が参加しやすいコースです。

訪問先は、東京スーパーエコタウンに展開するリサイクル施設5箇所、水素ステーション、東京ガスの液化天然ガスの工場、メガソーラー（大規模な太陽光発電）、そして東京湾にある巨大なゴミの埋立地と盛りだくさんです。

東京スーパーエコタウンでは、リサイクルの現状と課題を、視覚と聴覚と嗅覚で実感します。メガソーラーでは自然エネルギーの現状と課題、さらに水素ステーションと天然ガスの工場では、最近注目されている水素と天然ガスという気体のエネルギーの特徴（利点と難しさ）も実感します。最後にごみの終着地である埋立処分場を訪問し、ごみ問題について考えます。

学習を終えて

この度は弊社のイワタニ水素ステーション芝公園を見学していただき、ありがとうございました。とくに法政大学人間環境学部のみなさんに説明できたことを嬉しく思います。みなさんが熱心に質問していたのが印象的でした。今回のフィールドスタディが今後の学習の一助になることを願っています。

新濱皓平さん

(岩谷産業(株)・2010年度人間環境学部卒業生)



▲イワタニ水素ステーション芝公園において、水素自動車の説明を受ける様子。岩谷産業(株)に就職した本学部のOBが説明を担当しました。



▲東京ガス根岸工場LNGスクエアを訪問。巨大な液化天然ガスのタンクが圧巻でした。低温実験も楽しみました。

16 伊豆大島の魅力発見 —フィールドワーク事始め—



担当教員名 安岡 宏和・杉戸 信彦

コース概要

日程	2015年8月1日～5日
場所	東京都大島町(伊豆大島)
参加人数	36名

コースのねらい

本コースは、フィールドワークという学習・研究プロセスの導入部分を経験し、そのおもしろさを体験することをねらいとしています。

内容

FS参加者は、8月1日21時半、東京港竹芝桟橋に集合しました。深夜23時発の伊豆大島經由神津島行の大型客船さるびあ丸に乗船します。ロビーには高いテンションでしゃべりつづける若い男女のグループがごった返しています。夏の思い出をつくるために伊豆諸島へ向かうのでしょうか。



▲大島町郷土資料館。館長さんが伊豆大島の成り立ちについて解説している。



▲2013年の土砂災害跡。後方に削れた山が見える。



▲三原山噴火口のお鉢周り。水分を含んだ風が山を吹き上がり、雲霧がどんどん流れていく。

翌朝5時、さるびあ丸は伊豆大島に着岸しました。まだ眠たそうな顔をしながら、参加者のみなさんが船から降りてきます。伊豆大島は東京からもっとも近い離島で、100kmあまりしか離れていません。しかし、港に降りたつと、どこか異郷をおとずれたような高揚感が湧き出てきます。

初日はまず荷物を宿に置き、大島の中心地、元町界隈を歩きながら2013年10月に大島を襲った土砂災害の跡地を見学しました。自然災害のメカニズムは、被災してから振り返ってみると、どうしてそんな危険なところに平気で住んでいられたのだからと不思議に思うほど、合理的に説明できます。しかし、実際に災害がおきるまではそのようなリスクを意識するひとは多くありません。

午後は三原山に登りました。植物を観察しながら三原山のカルデラを歩くと、そこには噴火の歴史が刻まれていることがわかります。流出した溶岩の年代におうじてステージの異なる植生が見られるのです。火口のお鉢周りをしながら山の裏側にあたる東側斜面を見下ろすと、霧の合間から「裏砂漠」が山腹に広がっているのが見えます。吹き下ろしの強い風のために植物が根づかないのでしょうか。

2日目と3日目は、少人数のグループにわかれ、前もってリストアップしていた場所へむかいます。ちょっと勇気をだして、ヒッチハイクをしてみるのもいいかもしれません。いろいろな人と話しているうちに、事前に考えていた行き先よりもっと興味深いところが見つかるかもしれません。そうなれば予定など変えてしましましょう。フィールドワークで重要なことの一つは、現地での出会いや出来事に臨機応変に対応することです。

出会った人とお話をするときには、その人はいったい「誰なのか」ということを考えながら会話をすすめてみましょう。「大島の島民」では大雑把すぎるし、「〇〇さん」という個人名では小さすぎます。話を聞いた人を適切に「命名」できるかどうか、話の内容の情報としての価値をきめるのです。また、反対に、相手は自分のことを「誰」だと思っていたのでしょうか。「東京から来た学生さん」でしょうか。

最終日は、大島町役場の観光担当の方にお時間をいただき、大島で見聞きしたことを報告したあと、お昼頃に元町港で現地解散しました。秋学期の事後学習では、大島で見聞きしたことを班ごとにまとめ、それを踏まえて、かりに本格的なフィールドワークをするとすれば、どのようなテーマで、どのようなリサーチクエストを立てるか、という計画を立て、プレゼンをしました。

学習を終えて

私は「伊豆大島の人々が自然とどのように共生してきたのか」に注目して取り組みました。現地では出会った方に案内していただいたり、自分たちで様々な場所へ足を運んだりして、座学だけでは知ることのできないことをたくさん得てきました。みなさん本当に温かい方々でした。事前に調べて、実際に行き、帰ってきてからまとめる、という流れのFSは本当に良い経験で、行ってよかったです。

(2年 菊池眞利子)

17 歴史的環境の保全を考える



担当教員名 根崎 光男

コース概要

日程	2015年9月2日～5日
場所	神奈川県小田原市・箱根町、埼玉県川越市
参加人数	20名

コースのねらい

歴史的建造物群および文化的景観などの歴史的環境の現場を見学し、各自治体の文化財保護の取り組みを学びます。

内容

本フィールドスタディの特色は、旧東海道に位置づく小田原城、箱根関所、杉並木、石畳、一里塚、三島大社などの史跡や建造物・天然記念物などの文化財も残る神奈川県小田原市・箱根町、静岡県三島市と、小江戸とも呼ばれて本丸御殿や時の鐘、そして土蔵造りの伝統的建造物群が残る旧城下町である埼玉県川越市を巡回するコースであり、歴史的環境の保全を考えるのにふさわしい地域です。いずれも国内有数の観光地であり、歴史的資源を活用してどのような町づくりに取り組んでいるのかも学べる恰好の地域でもあります。

1日目：午前、JR小田原駅集合。午後、小田原城・城址公園に向かい、解説を聞きながら散策。国史跡小田原城保全の現場に触れる。バス移動で静岡県三島市に向い、三島大社を見学。

2日目：午前、神奈川県箱根町に向い、旧東海道の杉並木・石畳を散策、その保全状況を学習。午後、箱根町立郷土資料館で「文化財の現状と課題」の講

義を受ける。文化財保護と町づくりを学習。

3日目：午前、噴火警戒レベル2のなか、安全性を考慮しながら箱根町内の箱根関所を見学、遊覧船にて芦ノ湖・桃源台を廻る。午後、箱根湯本の商店街見学、観光客の少なさに驚く。現地解散。

4日目：午前、川越市駅集合。徒歩で蔵造りの町並みや城下町のシンボル・時の鐘を散策。午後、川越城本丸御殿に向い、解説を聞きながら見学。歴史的な景観保全と町づくりの現場に触れる。

学習を終えて

「歴史的環境の保全を考える」をテーマに小田原、三島、箱根、小江戸川越に行ってきました。実際に保全が行われている史跡や建物に触れることで、どれほど当時の景観を残しているのか、町の保全を行う上での課題、そしてそれらがどれだけ観光客や町の人々に大事にされているのかを感じる事が出来ました。また箱根町役場で、文化財担当者から史跡の保全などの仕方や保全にあたっての課題など、多くのお話を聞くことができました。私は漠然と、歴史的・文化的に貴重なものは守られるべきと思っていたのですが、実際にどのように保全し、どのような苦労があるのかを考えたことはありませんでした。しかし、財政的な問題や、文化財の保護については住民からの理解や賛同を得づらいなどの課題があることを知り、また担当者の文化財保護への思い入れや地域住民への啓蒙活動に触れ、文化財保護を学ぶことの大切さを知りました。

たくさん勉強もしましたが、美味しいものを食べたり、観光したりもでき、とても楽しい4日間でした。

2年 光安 沙輝子



▲三島大社にて概要説明



▲箱根杉並木の現状説明



▲川越・時の鐘前にて

18 石垣島・白保における サンゴ礁文化継承のとりくみを学ぶ

担当教員名 梶 裕史

コース概要

日程	2015年3月5日～9日
場所	沖縄県石垣島・白保集落
参加人数	14名

コースのねらい

「サンゴ礁文化」とは何か、またそれを継承することにはどんな意義があるのか、住民主体で持続的な地域づくりにとり組んでいる白保集落で近年開始された、手づくりの「スタディツアー」に参加して実感的に体験学習します。

内容

日本最南の沖縄県八重山諸島の主島・石垣島にある白保集落は、かつては「魚湧く海」と呼ばれた豊かなサンゴ礁の海に面して、自然の恵みを持続的に暮らしに活かす「半農半漁」の自給自足的な生活文化を築いてきた農村です。この白保は、海の埋め立てによる新空港建設計画をめぐる長年の問題を乗り越え、21世紀から、外部自然保護団体WWFが設立した組織「しらほサンゴ村」と地域住民有志との協働により、サンゴ礁文化の継承による持続的な地域づくりのとりくみを始めました。その活動は現在第二段階に入り、NPO夏花という新たな住民組織に受け継がれています。このNPOが収入源の一つとして始めたのが、地域のとりくみを体験実習するプログラムを豊かに含む「スタディツアー」です。本FSでは、初日の夕方までに現地集合、2日目にマイクロバスにて石垣島の概観を得る島内めぐりののち、午後からスタディツアーに参加しました。

2日目：午後「入村式」（しらほサンゴ村にて）サンゴ礁文化のレクチャーのあと、住民ガイドと一緒に、沖縄の伝統的な集落景観の「原風景」が残る集落を散策。サンゴ礁文化の具体例（建材としての利用など）に触れる

3日目：午前 シュノーケリング船でサンゴ礁観察
午後 農地からの赤土流出防止「グリーンベルト」づくりに協力（伝統織物の材料「糸芭蕉」を株植え）
サンゴ村に戻って、名物オバァを「講師」とするミニ方言講習

夕方～ 夕食交流会 民泊（ホームスティ）先の方々などと一緒に、白保の海や田畑で採れた食材による夕食。
方言による参加者自己紹介、地元小学生が披露する伝統芸能披露、学生も混ぜての総踊り など

4日目：「グリーンベルト」植栽の代表的な素材である月桃（げっとう）の高度加工施設（新設）の試運転手伝い

「白保日曜日」見学（地域活動の重要な収入源で、月桃を使った新商品など地産地消の「6次産品」販売も豊富）
午後から、ホームスティ先の「稼業」（農業、畜産、織物など）体験 夜は民泊

5日目：自由行動（伝統文化保全で白保の「先輩」格にあたる竹富島訪問） 午後、白保に集合し「離村式」現地解散

以上の日程をみると、「海」と離れてみえるプログラムも少なくないのですが、全て、海と陸上の暮らしとの密接なつながり—白保住民が陸上でエコな農業やライフスタイルを築かないと、「魚湧く海」「命継ぎの海」の保全は難しいことを伝えるねらいがこめられています。サンゴ礁を健康な状態に保っていくためには、地域をあげてのとりくみが必要であり、そのためには、住民の結束・連帯が不可欠です。祖先が築いてきた伝統文化が、自然の恵みを受け続けて生き延びる知恵の優れた集積であることが今の住民達に広く再評価されれば、伝統継承のとりくみは結束を強める優れた手段となるはずですね。ただ、その活動がボランティアではなく「収益」も伴うものであることが、住民の参加を促進するために非常に大切です。よって有料のスタディツアーに参加することは、ささやかながら白保の地域活動に貢献することにもつながります。

このスタディツアーの最大の「売り」は、意識の高いNPO理事の方々の家庭に分宿し、稼業を体験するホームスティでしょう。3泊のうち1泊がこれに当てられ、体験者は、単に「自然」にふれるだけではなく、伝統的な生活文化の生きた体現者、すなわち自然に寄り添って生きる力を豊かに持つ人々と親しく触れ合えることこそ、自然と共生してきた文化が残る場所を訪問する最大の魅力であるこ

と—「人」が地域の最も尊い資源であることに気付けるはずで

ホームスティでの心に残るふれあいから、「いつか必ずもう一度白保に来たい」と思う参加者が多かったことは、このスタディツアーの意義をよく物語るものです。一度きりの旅ではなく、リピーターとして、「白保ファン」になって再訪してくれ、地域活動のサポーターになってくれるような体験者を増やすこと、これがNPOがめざす真の「交流」なのです。私達はささやかながらサポーターの一員となるべく、継続的にプログラム作りに協力していきたいと思っています。



▲シュノーケリング 500歳のハマサンゴの背中にて



▲赤土流出防止グリーンベルト作り 糸芭蕉200株

学習を終えて

「白保の一員になれたような親近感」

1年 宮城健太郎



ホームスティでお世話になった美里清矩さんは、タマネギ・オクラ・ゴーヤ・サトウキビなどの作物を栽培する農家です。タマネギ収穫手伝いの体験や、新鮮な野菜や白保特有のものを使った晩ご飯、そして沢山の白保に関するお話など、FS中で一番密度の濃い一時を過ごすことが出来ました。農村としてのあり方がサンゴ礁の健康を左右することや、「おかずとりの海」の豊かさを再生するためには収穫高を削る覚悟も必要なことなど、海と畑とのつながりを、白保の一員になれたような親近感をもって、実感することができました。

「伝統への誇りが環境保全につながることを実感」

1年 磯部千尋



ホームスティでは、主にかぼちゃを作っている農家の兼浜秀雄さん宅にお世話になり、農業体験はもちろん、兼浜さん流「三線教室」や、皆家族のような近所づきあいの話題など、白保の暮らしの伝統について、本当の子どもに接するように熱心に教えて下さいました。地域の生活文化への強い愛着や誇りが、自然環境保全で力を合わせる根源にもなることを強く実感できた体験となりました。

19 開発途上国における持続可能性 —被災からの復興と生態系保全—

担当教員名 武貞 稔彦・高田 雅之

コース概要

日程	2015年8月24日～9月1日
場所	スリランカ
参加人数	26名

コースのねらい

本フィールドスタディの目的は、経済協力や援助の対象となっている開発途上国と呼ばれる国や地域の暮らしや人々について、五感を使って知ると同時に、「持続可能性」について日本と比較しながら考えることです。2015年度は、2004年にインド洋大津波の被害を受けたスリランカを訪問し、(1) 現地と日本における被災／復興の異同について考えること、(2) 生態系保全と開発の関係について考えることを主な内容とします。

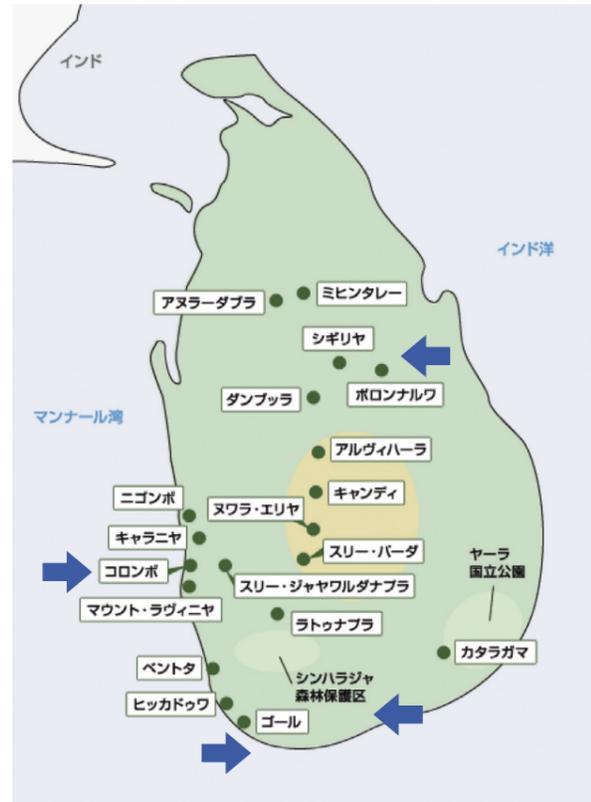
内容

途上国と呼ばれる国や地域には、多くの人はなかなか訪れる機会がないと思います。観光地とは異なる、また自分たちが思っている途上国とは異なる町の姿、人々の暮らしがあることを知ってもらえるような、「途上国入門編」とも言えるコースです。途上国での経験が豊富な教員やコーディネーターがツアーを引率しますので、観光旅行とは異なる視点で、安全や健康にも留意した訪問が可能です。今年のコースでは以下の街などを訪問しました。

まずコロンボでは国際協力機構（JICA）スリランカ事務所での援助の現場で働く人々の講演を聞きます。青年海外協力隊の人たちとの交流会も催しました。モラトワ大学では環境工学を学ぶ現地の学生との交流会を催しました。コミュニケーション言語はもちろん（上手くなくても）英語です。

スリランカ南部の海岸にあるゴールではゴール漁港を訪問しました。インド洋大津波の被害を受けた街の漁港です。日本の援助で再建された施設を見学し、漁民の話を知りました。また、被災者の再定住先を訪問し、津波で家を失った人々が、NGOの支援を受けて移り住んだ集落を訪問しインタビューを行うことで、被災から10年を経た人々の生活の様子を少しですが知ることができました。ゴールを拠点にして、少し内陸部に入ったスリランカに唯

スリランカ図
(主な訪問先は矢印で示した)



一残る熱帯雨林と呼ばれるシンハラジャ森林保護区にも足を伸ばしました。レンジャーの方に貴重な動植物を教してもらいながら開発と保全の関係や、日本の自然との差異を考えました。

キャンディは最後の王朝があった内陸部の大都市です。訪問時はベラヘラ祭りという非常に大きなお祭りの当日で全国からの人出で賑わっており、重要な仏教寺院の見学をしました。さらに北部に移動してシギリヤでは、シギリヤロックという世界遺産に指定されている史跡を山頂まで登って見学しました。コロンボへの帰途には象の孤児院と呼ばれる、親からはぐれた子象などを保護し野生に返すためのセンターを訪問しました。象の水浴びを間近でみることができます。

現地を訪問する前には、事前学習として訪問先のことや自分たちでテーマを決めて調査／研究をすすめ、それを参加者全員でシェアしてから現地に向かいます。今回は特に、事前学習の一環として、2011年の東日本大震災の

被災地である、陸前高田市広田町を一泊二日で訪問しました。そこでは、移住した法政大学OBが活躍するNPO（「SET」）の協力を得て、グループに分かれて民泊を行いました。学生達は広田町の方たちから貴重なお話を伺えたようです。

事前に日本の被災地を訪問した理由は、スリランカの被災地と比較をすることも一つですが、日本でまだまだ復興が終わったとは言えない状況の中、途上国の貧困をなくすために支援を行うことについて、各人がどのように考えるのか、またそもそも「支援」とは何なのか、という問いをより深く考えてもらうきっかけとするためでした。

簡単には答えの出ない問いについて、簡単にあきらめずに問い続けることを経験してもらえればと思っています。

学習を終えて

【参加学生の声】

ニュースからは気づけないような途上国の現実やスリランカにおいて津波被災者が本当に必要としている支援は何か考えるなど、有意義な時間を過ごせたFSでした。日本とは全く違う国を実際に訪れることで得られる何かがある

と思います。

(人間環境学部 2年 松尾紗佑美)

【モラトワ大学工学部マナトウング教授からのメッセージ】 (原文は英文のため翻訳しました。)

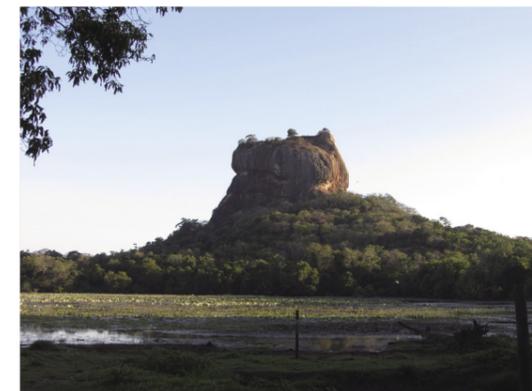
アユボワン！ スリランカの親しい友人である日本から、法政大学の学生たちを迎えることは私たちにとっても喜びです。モラトワ大学の学生たちが、どうやって日本から来るみなさんをもてなそうかと熱心に考えているのを見て、実際の交流会を楽しみにしていました。実際には私たちにとっても大変楽しく、かつ有意義な交流会となってよかったです。これからも新しい時代を築いていく若い世代が、国境を越えてつながりを深めていけることは非常に重要で、法政大学の訪問はその一つの好例だと思っています。



▲シンハラジャ森林保護区を散策



▲モラトワ大学の学生たちとスリランカの伝統菓子作りにチャレンジ



▲世界遺産シギリヤロック



▲国際協力機構（JICA）での防災担当職員の講演

20 島のサステナビリティと ハワイアンスタディーズ



担当教員名 西城戸 誠・岡松 暁子

コース概要

日程	2015年9月2日～12日
場所	アメリカ合衆国ハワイ州
参加人数	6名

コースのねらい

ハワイ州オアフ島で、環境と文化のサステナビリティの関係と英語によるコミュニケーション能力を実践的に学ぶ。

内容

ハワイは、日本人にとってとてもなじみの深い、海外の地域の一つでしょう。旅行で行ったことがある方も多いと思います。しかしながら、このハワイフィールドスタディは、通常の観光では決して理解することができない、ハワイの姿とその魅力について体感することができます。このフィールドスタディの学びのコンセプトは、①オアフ島を舞台として2つのサステナビリティの関係を理解することと、②英語を使つてのコミュニケーション、異文化理解を深めるというものです。①については、ハワイ王朝などのハワイの歴史、文化を学ぶ Bishop museum、ハワイの自然環境を学ぶために Waimea Botanic Garden、ハワイ大学海洋生態学研究所へ訪問する他、オアフ島の環境のサステナビリティの現場を学ぶために、福祉農園や、ゴミ処理発電所への訪問や、再生可能エネルギーの普及に努める Blue Planet Foundation の講義を受けました。また、ハワイ文化を学ぶ講義、ハワイ大学マノア校ハワイアンスタディーズでの実習 (Loi、タロイモ畑) を通して、ハワイにおけるカルチュラルサステナビリティについても学び、環境と文化の持続可能性の関連を考えることになりました。②については、受け入れ先の Kapiolani Community College (KCC) において、コミュニケーションの方法、インタビューワークショップなどで英語と異文化理解の学習を行いました。また、KCC の学生との交流や、最終的には英語でのプレゼンテーションを行いました。初めての海外旅行で、英語に自信がなかった学生も、このハワイフィールドスタディによって、異文化理解とコミュニケーションの楽しさとスキルアップする

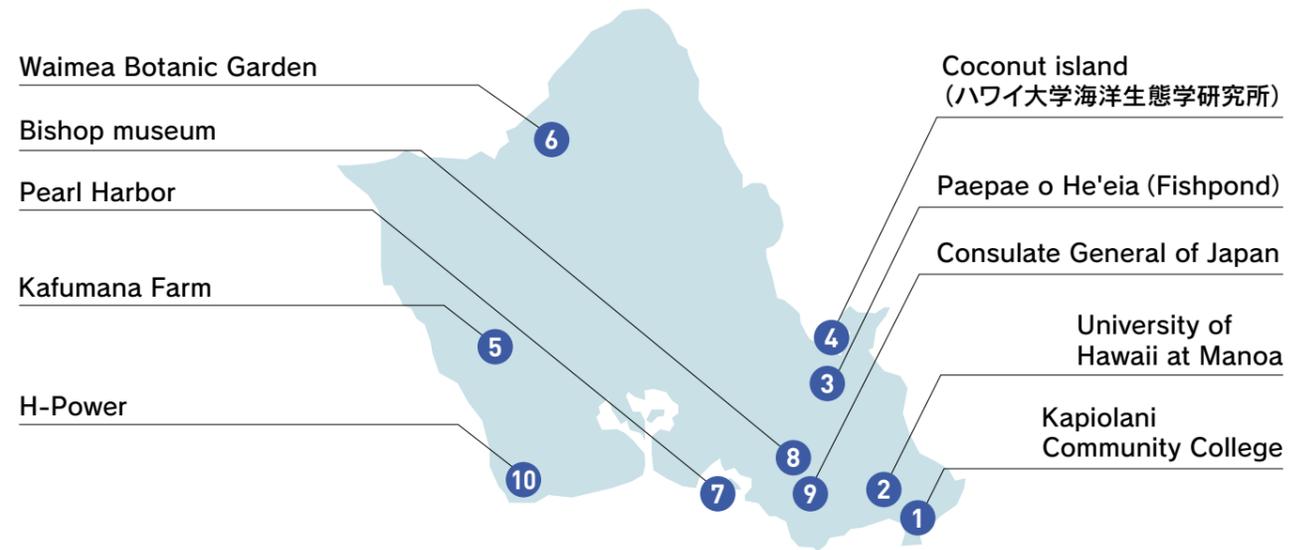
ことができましたし、英語が得意な学生はさらなるステップアップを目指すことになりました。

学習を終えて

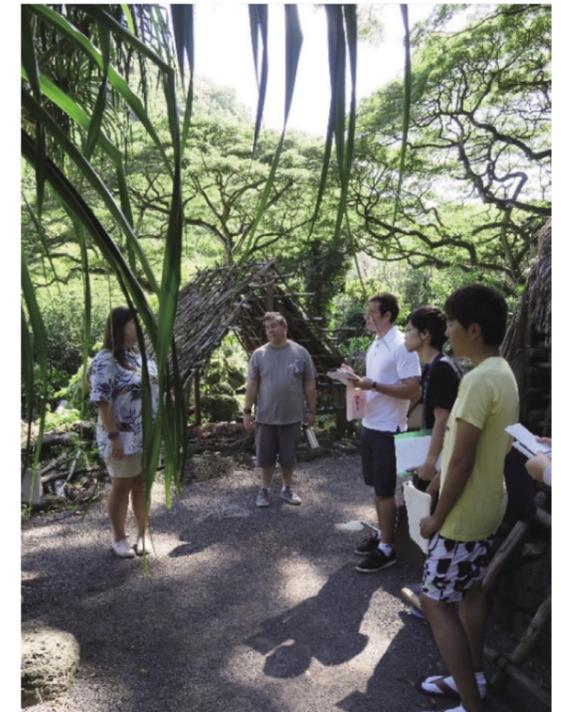
参加学生 (2年・若尾実紘) : 私がハワイFSに参加した当初の目的は英語能力の向上でした。しかし実際にハワイFSに参加して英語だけではなく、ハワイ文化について多くの事を学ぶことができました。例えば、日系人の方に移民の歴史について聞く機会や、ハワイの文化を実際に体験したり、戦後70年の節目にパールハーバーに行く事が出来た事は貴重な体験だったと思います。ハワイというと観光地のイメージがあった私ですが、普段の旅行ではいけない場所や私の知らなかったハワイの一側面を知る事ができるプログラムでした。

受け入れ先 (Kapiolani Community College 講師・Dr. Vince M Okada-Coelho) : 今回の研修では、ハワイの歴史や文化、また社会、環境問題について触れていただきました。現代にも伝わる伝統的なハワイアンの価値観や生活様式、日系移民の苦勞と努力、現代社会における環境問題への取り組みやイニシアチブ、多くの人と出会い、多くの意見を聞く機会があったと思います。大切なのはそれらを賛同することではありません。触れ合った意見や見解に対し、自分はどう思い、どのように世界観を上げていくのかというプロセス認識がとても大切だったと思います。ホオキパのクラスでは、グループや社会での皆さんの役割を考えてもらいました。今後も社会や世界に飛び立ち、多くの人と出会い、多くを経験されていかれることと思います。皆さんと時間を共に過ごし、多くのことに疑問を持ち、積極的に声を投げかける姿に、たくましさを感じました。これからも勉学に励み、皆さんの声を多く発信し続けてください。皆さんのご活躍を期待しております。またハワイにもお越しください。Mālama pono!

【訪問した場所・内容】



▲Blue Planet Foundationのレクチャーの後のワークショップ (@KCC ①)



▲Waimea Botanic Gardenでの現地実習



▲ゴミ処理発電所の見学 (⑩)



▲kapiolani Community Collegeでの修了式 (①)

21 フィールドスタディ・イン・オーストラリア



担当教員名 長峰 登記夫・長谷川 直哉

コース概要

日程	2016年2月27日～3月13日
場所	オーストラリア・ゴールドコースト
参加人数	19名

コースのねらい

英語学校で英語研修を行い、ホームステイでは生の英語にふれ、その経験を駆使しながらフィールドスタディで成果を試す。

コースの概要

オーストラリア・フィールドスタディ (AFS) には3つの特徴があります。それは、①大学付属英語学校での語学研修、②そこで得た知識を実地でためすことができるホームステイ、それに、③フィールドスタディで、この3つを统一的に学習・体験できるのがAFSの特徴です。

とくにFSではタンガルーマ島、ラミントン国立公園、

コアラ病院の3カ所を訪ねます。オーストラリアは世界でも最も豊かな自然環境をもち、かつ環境保護に力を入れている国のひとつですが、そこで自然環境保護と動物保護を勉強します。タンガルーマ島は世界で3番目に大きい砂でできた島ですが、そこでは環境保護のため自動車は禁止され、自家発電によって電気を自給し、水の循環利用をしたりと環境保護を徹底しています。それらについて英語によるセミナーを聞き、環境保護について学びます。

ラミントン国立公園は1994年にユネスコの世界遺産に



▲タンガルーマ島での天然イルカの餌づけ。天然ゆえに、運が悪ければイルカは来ないかも…。

登録された、熱帯雨林を体験できる場所です。熱帯雨林の中をしばらく散歩しながら、説明を受け、多くの亜熱帯、熱帯の珍しい動植物をみることができます。4WDトラックでの英語ガイドツアーでは雄大な自然を一望し、野生の鳥の餌付けや吊り橋ウォーキングなども体験できます。

コアラ病院はクイーンズランド州政府が運営し、野生動物、とくに絶滅が危惧されているコアラの救護活動を行っている、オーストラリアならではのユニークな動物病院です。この病院には毎年1000頭近

くの、交通事故でケガをしたり病気になったりしたコアラや他の野生動物が運ばれてきます。ここには2名の獣医と7名のレンジャー、約45名のボランティアが働いています。通常は、一般人の立ち入りはできませんが、特別許可



▲ラミントン国立公園で森の中の鳥の餌づけ

を得て、オーストラリアのユニークな動物たち（有袋類や単孔類）の臨床、看護などの実習を見学することができます。コアラ病院の訪問学習は今年新たに加えられたコースです。



▲英語学校で、様々な国から来たクラスメートと



▲2週間の最終日、HSファミリーとの最後のひととき

22 国際平和の追求 — 国際法の現場を知る —



担当教員名 岡松 暁子・武貞 稔彦

コース概要

日程	2015年3月9日～16日
場所	オランダ、ドイツ
参加人数	35名

コースのねらい

このフィールドスタディは、国際社会の平和がいかにして構築され、維持されているのかを、国際法の役割に注目して学ぶことを目的としています。具体的には、国際裁判所、化学兵器禁止機関などの国際機関を訪れ、そこで国際法実務に携わっている方々の講演を聞き、国際社会で働くこと、国際社会に貢献すること、の意味を考えます。また、世界遺産に登録されているリューベック旧市街地を訪れ、国際法が文化や歴史の継承にどのような役割を果たしているのかということ考察します。そして、アンネ・フランクの隠れ家やノイエングンメ強制収容所の見学からは、ナチスによるユダヤ人迫害について学ぶことで、人権問題が国際平和にとっていかに重要なことであるかについての識見を深めることを目指します。この研修によって、外国の歴史や文化に触れ、日本を振り返りつつ、国際感覚を身につけることができればと思っています。

内容

国際法の父といわれるグロチウスは、オランダのデルフトという町で生まれました。国際法を勉強する者は、一度はこのグロチウスの像を見に行くとされています。そこで我々も、なにはともあれグロチウス詣です。

デルフトは「真珠の耳飾りの少女」や「デルフトの眺望」などの絵画で有名なフェルメールが生まれ、生涯を過ごした町でもあります。アムステルダム国立美術館では「牛乳を注ぐ女」他、ハーグのマウリッツハイス美術館では上記の二作品を鑑賞しました。

〈国際機関、日本大使館訪問〉

1. 国際司法裁判所 (ICJ) は、国際連合の主要な司法機関で、国家間の紛争を裁判するところです。我々はこの裁判所の法廷で、職員の方から英語で国際裁判の仕組みや特徴についての説明を受け、それに対して英語で質問をしました。

2. 国際刑事裁判所 (ICC) では、日本人の法律顧問の方からお話を伺い、国際社会が個人を裁くことの意味を考えました。また、日本人として国際社会で働くために必要なことなどについても伺いました。

3. 化学兵器禁止機関 (OPCW) は、その功績から2013年にノーベル平和賞を受賞した機関です。そこでも、英語による説明を受け、質疑を行いました。すでに存

在する化学兵器の廃棄が深刻な問題であることについて考えさせられました。

4. 在蘭日本大使館では、外交官の方々から、国際社会で日本が果たす役割について、また、外国からみた日本についての貴重なお話を伺うことができました。

5. ハンブルクの国際海洋法裁判所 (ITLOS) では、柳井俊二判事より、これまでに同裁判所で争われた事例や、海の国際管理について、大法廷にてご講演をいただきました。海洋国家である日本が海の秩序形成に果たす役割は大きいと感じた時間でした。

(下記に柳井判事からのメッセージがあります。)

〈人権について考える：ユダヤ人迫害問題を題材に〉

アムステルダムにあるアンネ・フランクの家は、第二次世界大戦期にナチスの迫害から逃れるために、フランク一家など8名が隠れていた家です。本棚の裏の部屋で約2年もの間、息を殺すようにして生活していたことを思うと、胸が痛みました。

ハンブルグ郊外のノイエングンメ強制収容所には、ユダヤ人が働かされていた工場の後が残っています。ここに来ると学生たちの言葉が少なくなり、このような悲劇を二度と繰り返してはいけないとの思いを強めました。

〈その他〉

一日の研修が終わったあとは、遅くまであいている美術館や、オペラの鑑賞など、思い思いの時間を過ごしました。ヨーロッパの文化に触れ、多様性を身をもって感じ、世界で仕事をする日本人の方々と交流することで、それぞれが大きな刺激を受けたことと思います。

学習を終えて

〈1年 稲岡志遠〉

私は高校時代に留学をしたときの経験から、多民族が暮

らしている地域で、異なるバックグラウンドを持つ人々と正しくコミュニケーションをとることは難しいことだと感じていました。そこで、今回のフィールドスタディに参加するにあたり、国際機関での講演の際には、多くの国が参加する国際会議で各国の代表がどのようにコミュニケーションを取り合っているのか、国際機関で働く職員にとって仕事をする上で大切なことは何か、などについて、自分の得意とする英語で質問をすることを心がけました。そして改めて、「自分の意見を正しく伝えること」が国際社会の平和の実現にとって大切なことなのだと感じました。例えば、参加後は、国際関連のニュースを見聞きすると、より身近に感じられるようになりました。担当教授はじめ関係者の方々に感謝しています。

〈国際海洋法裁判所判事 柳井俊二様〉

法政大学フィールド・スタディー受け入れ先の一つとして、在ハンブルク国際海洋法裁判所でこれまで三回学生達を受け入れ、大法廷において同裁判所の判例を中心に講義を行い、学生達と引率の先生方の打ち上げ会に参加して学生達の声を直接聞くこともできた。参加学生達は皆、新鮮な刺激を受けていた。同時に、英語力の弱さを痛感した学生達も多かった。新しい文化は、しばしば異文化間の交流から創造される。特に若年層の内向き傾向が強い我が国では、若い内に外国の文化に接して良い刺激を受ける機会を提供することが大事である。その意味で、このフィールド・スタディーは、素晴らしいプログラムである。更に、このような海外研修を一過性のものとするのではなく、留学等一層の国際経験獲得に向けた指導をすることも必要であろう。グローバルに活動する内外の企業が国際経験を持つ人材を求めていることを学生達は知るべきである。

